短歌の部

伊勢方信　選

☆☆　特　選　☆☆

年越しに帰りし孫に教えつつ荒神さまの注連縄を綯う

国東市　糸永　光

「荒神」は「三方荒神」の略。俗信だが火伏せの神、陰で家を守護する神として祀られてきた。日本人の精神文化の一つでもある、目には見えない力への感謝の気持ちを、注連縄を共に綯(な)うという行為で伝えようとしている。

☆　入　選　☆

ゲルニカにミサイルでない抑止力今日も土練る半農半陶

由布市　佐藤　文人

都市無差別攻撃を主題に、ドイツ空軍によるスペインのゲルニカを描いたピカソの絵が「ゲルニカ」。一市民の時宜に応じた非戦の歌。

月蝕の終りて児らは新しき光浴びをり濃き影跳ぬる

杵築市　伊藤　美佐子

昨年十一月の皆既月蝕(げつしょく)は天王星蝕と重なった。神秘的な天空の現象に耽っていた児童らの解放感が、下の句に凝縮されている。

満天の星空行きの汽車が出る面会禁止の施設の駅を

豊後高田市　臼野　青雲

モチーフは宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」松本零士の「銀河鉄道999」。不自由さを伴う施設にあって、羽搏く自分をイメージしている。

山本和可子　選

☆☆　特　選　☆☆

千人針広げしごとくに山もみじ九重連山はや冬隣り

杵築市　財前　春子

九重連山の紅葉を千人針を広げたようだと喩えた点異彩を放つ。千人針を知らない世代への語部的な歌であり、敗戦後七十八年の世情不安の世にあって「冬隣り」という造語も示唆に豊む。詩情豊かな反戦歌である。

☆　入　選　☆

姉兄と遺品整理の手も止まる小さき桐箱「へその緒」三つ

佐伯市　西田　三津子

身を分けて三人の子を産んでくれた母の愛をひしひしと感じる瞬間。神聖な三つのへその緒に皆で立ち合えた幸を見事に表している。

ジャズの調べコーヒーの香り窓の雪編み物する手リズムに乗りて

玖珠町　宿利　スミ子

余生とはしがらみから解き放たれ好みのものに囲まれて過ごせる幸せな時でもある。お洒落で創造的な明るい作者の生き方が美しい。

雪降れる櫟林にわが通ふ踏み分け道がほそほそと見ゆ

九重町　後藤　信子

多くを語らず写生に徹して余情を生む作歌力は他者の追随を許さない。堅実な暮しをいとおしむ気持ちが身に沁みて伝わってくる。

太田宅美　選

☆☆　特　選　☆☆

病床で「父さん来んなあ」と言う母に父亡きことを告げられぬ我

大分市　丸山　礼子

長く入院されている母親か。新型コロナ禍で父親の葬儀も最小限の見送りが多く、母親にも未だ告げられぬ病状を案じる家族を想像し悲しみが深く伝わる。作者は病状を察しながら、そのうちに告げようか、と迷っている。

☆　入　選　☆

ドリル解く母独りごう「人生で今が一番勉強しよる」

佐伯市　稲好　史朗

若い頃は子育てや雑事で自分の時間が取れなかった事が想像される。生活に少しゆとりが出来て、下の句のユーモアが読者に深く伝わる。

地球は一つ国境線はなかったと宇宙飛行士帰還の一声

大分市　安倍　雄代

日本は令和というのに世界は不安定極まりない。人工衛星四百㎞上空からの地球は丸く美しく、勿論国境は見えず、人類の平和を願って同感。

仏飯を程良き間合ひにひきさげて春の朝餉の椀にほぐしぬ

別府市　入田　良子

お仏飯を毎朝欠かさない生活が嬉しい。「上げぬより下げぬ罰」も畏敬の暮し。二句に自然体と作者の信念が程よく伝わり、よい家庭ぶり。